

# 早乙女坂の合戦

新美 健

「あな、めでたや」

「やれ、うれしや」

すかっと天板が抜けたように空は高く、清々しいほど晴れ渡っていた。

天文十八年（一五四九）の九月だ。

野辺山から見下ろせば、稲刈りを終えた田んぼがさっぱりした顔でひろがっていた。

ざざっ、と清涼な秋風が吹き抜ける。すすきの穂がたおやかにゆれ、さらさらと荒川の水面がせせらぐ。

向いに見ゆる早乙女の丘陵でも、楓や紅葉が色づきはじめていた。

下野国塩谷郡の喜連川であった。

この地には狐が多く棲み、古くは狐川と呼ばれていたとも伝えられている。

「ほんに良き日よのう」

「まこと、めでたき日であるな」

口々にさざめいているのは、鄙には似つかわしくない典雅な装束の者たちであった。烏帽子をかぶり、袍をまとい、平安朝期の絵巻物から、するりと抜けてきたように浮世離れした風情の貴人たちだ。

木漏れ日が差し込む森の中で、真新しい畳が惜しげもなく並べられ、引き出物の鮎が山を成していた。

めでたき祝言の場なのである。

「おお、凛々しい婿どのじゃて」

「げに、なんとも愛らしき嫁御よ」

立派な金屏風を背に澄まし顔で座っているふたりは、束帯と十二単で着飾った白面の美男美女であった。

まさに男雛と女雛だ。初々しくも華やかな姿であった。

「宇都宮の婿どのに那須の嫁御じゃ。これで両家の縁も、ますます深くなるうて」

公家姿の貴人たちは眼を細め、禰宜と巫女も恭しくかしこまっている。

よほど血縁の深い一族なのであろうか。どの顔も奇妙なほど似通っていた。双眸は高貴に吊り上がり、鼻筋がすっきりと通って、つんと誇らしく先が尖っていた。

雅な笛の音。鉦と鼓も鳴らされた。

ぱらぱら、と。

この晴天にときならぬ小雨が通りすぎたかと思うと、桃色の頬をした小冠者が息急き切って駆け込んできた。

「合戦にございます。合戦でございまする」

早乙女の丘陵で、宇都宮家と那須家の軍勢が衝突したというのだ。

「なんと！」

「今朝方に、那須家の騎馬武者がせわしなく駆けておったゆえ、よもやとは思って  
おったが」

「このめでたき日にかような凶事におよぶとは、なんと興ざめな」

「粗野な侍どもめが」

宇都宮氏は、永承六年（一〇五一）に勃発した奥州十二年合戦での功によって宇都  
宮別当職に任じられた藤原宗円を初代とする。「関東一の弓取り」「坂東一の弓取  
り」と評され、北朝と南朝が激しく対立した時代においては、楠木正成も戦わずに退  
いたという勇猛なる武家であった。

一方の那須氏も、源平の物語において屋島の戦いで名高い那須与一を輩出したとき  
れる武勲の家だ。

那須郡は軍馬の名産地でもあり、昔に比すれば勢力も衰えたとはいえ、かつては結  
城氏や佐竹氏と並んで関東八屋形かんとうはちやかたのひとつに数えられていたほどであった。

「やれ、こうなったからには、しばらく成り行きを窺おうとしようぞ」

やがて、次の物見が戻ってきた。

「さて、双方の陣立てはいかに？」

「待て待て。まず絵図をこしらえよう」

見事な白髯を垂らした老翁が、ひょいと枯れ枝を拾い上げた。

すう、と細い先端を畳につける。さして力を込めたようにも見えないが、ずず、と  
豆腐を削るように枝の先がめり込んだ。

ずり、ずりずり、と井草の匂い立つ真新しい畳に無残な傷をつけていく。

「ほうれ、これが荒川の流れて、この細長いのが早乙女じゃ」

喜連川を絵図で描いているのだ。

東西を山地に挟まれ、川筋にえぐられた数条の丘陵が延びている。祝言の場は野辺  
山で、その裏手には内川があり、北方から東南の一部は那須氏の領地であった。

眼を南に戻せば、荒川を挟んで早乙女の丘陵が長々と横たわり、早乙女を越えれば  
芳賀氏の領地である氏家郡二十四郷となる。

氏家は水に恵まれた穀倉地帯だ。奥州と鎌倉をむすぶ奥大道おくだいどうと物流の要となる鬼怒  
川がわを押さえた要衝の地であった。

「ほれ、せっかくの戯れじゃ。誰ぞ双方の陣営に座るがよい」

「うむ、戯れとあれば」

新婿と新嫁が、につ、と眼で笑いあった。

「わしが宇都宮勢に立とうぞ」

「なれば、わらわが那須勢を」

陣地の絵図を挟んで、来世まで添い遂げようと契りを誓った若いふたりが仲睦まじく対座した。

「ほほっ、祝言の場でさっそく一戦とは、たしかに一興であろうぞ」

貴人たちは嬉々として囃したてた。

「そもそも、どちらが攻め込んだのだ？」

老翁が発端を問うと、新婿が宇都宮家に成り代わって答えた。

「我が宇都宮家当主を次々と葬り去った憎き佞臣……ねいしん 芳賀高経の子である高照はがたかつねめが白河結城氏を頼って落ちたことが発端にて」

「ほう、芳賀高経とは、それほど悪辣であったというのか？」

「悪辣も悪辣」

と新婿の眼に義憤が灯った。

「宇都宮家十七代当主の成綱しげつなは、兵事と政略の両輪に長けた我が宇都宮家中興の祖でございました。父御の病死によって宇都宮家を継ぎ、十歳と若すぎる当主であったがゆえ、重臣たちの侮(あなど)りを受けましたが、長じるや武によって叛乱勢力を一掃かさいし、家宰として権勢をほしいがままにしていた芳賀高勝たかかつ ちゅうきつを誅殺することで、ようやくに家中の一本化を成し遂げたのです」

さらには、古河公方家の内紛に介入して勝利をおさめ、巧みに婚姻政策を駆使して北関東の覇者となった。

「とはいえ……」

と成綱の覇業を誇らしげに語っていた新婿の表情が曇った。

「成綱が没するや、まともや宇都宮家は内訌(ないこう)の嵐にさらされました。嫡男ただつなの忠綱は放逐され、成綱の末子である興綱おきつなを傀儡とする芳賀氏かいらいと壬生氏みぶの専横を許してしまった。しかも、興綱は当主としての力を蓄える前に、芳賀高経と壬生綱房つなふさによって幽閉され、おいたわしくも自害の憂き目に……」

新婿が宇都宮家を襲った無常の運命を嘆くと、気の利いた巫女が笛を構え、ひりり、ひりり、ともの悲しく吹き鳴らした。

近隣の住人であれば誰もが知っていることであったが、貴人たちは初めて耳にする物語のように眼を輝かせて聞いていた。

それを見て、新嫁は口元に冷ややかな笑みを灯してつぶやいた。

「武家の内訌とは、さても醜悪なりしこと」

新婿は、やや興ざめな表情を浮かべたが、すぐに気を取りなした。

「まさに……人の世とは愚かなり……」

「先をつづけなされ」

と老翁に促され、新婿は居住まいを正して強くうなずいた。

「次の宇都宮家当主こそ、二十代目にあたる当代の尚綱<sup>ひさつな</sup>。跡目争いの愚を避けるため、僧となっていた尚綱は還俗<sup>げんぞく</sup>させられ、やはり芳賀氏と壬生氏の傀儡として家督を継ぐことになりました。なれど、寺育ちの忍耐と慎重さがあったものか、忠綱と興綱のような轍は踏みませぬ。冷徹な眼で物事を見定め、仇の片割れである壬生氏の綱房とさえ手を結び、憎き芳賀高経を討ちて家中を掌握し、高経の子である高照も追放したのです」

「おお！」

「痛快！ 痛快！」

やんややんやと盛り上がり、貴人たちは快哉を叫んだ。

こたびの合戦において、まさに宇都宮勢を率いているのが尚綱なのである。

「ところが、これに芳賀氏と親密であった塩谷氏が嫌悪をあらわにし、那須氏と手を結んで宇都宮氏と壬生氏に敵対したのです」

「なんと奇妙な。塩谷氏も宇都宮家の一族ではないか」

塩谷氏と那須氏は領地で隣接し、この喜連川も塩谷氏が治める東南端であり、荒川と内川が合流する大蔵ヶ崎(おおくらがさき)に城を築いて睨(にら)みを利かせているのだ。

「家中が内訌に淫しておれば、一族の結束も弱まろうというもの」

「なるほど。塩谷氏と通じておらねば、那須勢も早乙女(そうとめ)の街道を易々と使えまいて」

「塩谷氏は、義によって芳賀氏を御助けいたしたのでしょう」

聴衆の貴人たちも納得の言葉を口々にささやき合っていた。

はあて、と老翁は芝居がかった惚(ぼ)けの表情で遠くを見やった。

「なれど、それで那須家が兵を出すとは解せぬこと。隣国同士は争うものとはいえ、両家は姻戚をむすんでいたのでは？」

その問いかけには、新嫁が那須家に成り代わって答える。

「それも昔々のこと。しかも、我が那須氏が上那須氏と下那須氏に分かたれていたころでありましょう」

「おお、そうであったな」

わざとらしく老翁は手を打った。

新嫁は、さらに言葉で切り込んだ。

「宇都宮成綱は、狡猾な男でありました。上那須の当主であった資(すけ)親(ちか)の娘を正室として迎えながら、資親が没するや跡継ぎ争いに乗じて那須家乗っ取りを企んだものの……ほほっ、下那須が上下那須の統一を成し遂げたことで、成綱めの策謀も水泡に帰したのです」

新嫁が愉快千万とばかりに笑うのを見て、

「狡猾とは、我が妻も口のはしたなきこと」

と新婿は気色ばんだ。

しかし、新嫁は怨嗟(えんさ)を込めてつづけた。

「我が那須家は統一を果たしたのちも、宇都宮家の策謀に翻弄されました。当主の父が宇都宮氏とともに古河公方に味方すれば、その子はかんとうかんれい関東管領上杉氏につくなど、父子で敵と味方として対立することを強いられておりました。十九代目当主である那須高資は、それを忘れておりませぬ。それゆえ芳賀高照を哀れと思し、兵を出したの  
でしょう」

否、と新婿は口を挟んだ。黙ってはいられなくなっただらしい。

「父子の相克(そうこく)は、那須家の宿痾(しゆくあ)。我が宇都宮家にはかかわりなきこと」

「ほほ、口先ではいかようにも」

「策謀といえば、那須家もなかなかの上手。塩谷を宇都宮より離反させんと裏で卑しき企みを巡らせていたのでしょう」

「いわれなき疑いは迷惑。そのように吠えられるとは、宇都宮家に大義なしと白状しておるようなものでしょうに」

「なんの、すでに古河公方より、那須氏討伐の下知を得たと耳にしております」

「おお、勇ましきこと勇ましきこと」

新嫁の口に嘲りがひろがり、耳元まで裂けるような笑みとなった。

新婿は低くうなった。眼は怒りに燃え、獐猛な牙を剥いている。

「こはいかに」

「はやくも夫婦の相克ぞ」

貴人たちは困惑の顔を見合わせた。

軽い戯れではじめたつもりが、どうにも雲行きが怪しくなってきた。

「那須は父子の相克。宇都宮は重臣の内訌。どちらもどちらじゃ」

「ともあれ、両家に争いの種はたんまりとあり、そこへ芳賀高照が窮鳥として飛び込んできた」と

ふんふん、と老翁は悠然とうなずいた。

「夫婦の諍いも、この戦が片づけば納まるべきところに納まろう。これ、物見の冠者よ。戦はどうなっておるか？」

「はっ、早乙女坂の頂を目指していた宇都宮勢に那須勢が攻めかかりました」

「数は？」

「二千騎にて」

家老の芳賀高照はいないが、宇都宮尚綱を総大将に、庶流の多功たこう氏が先陣となり、勝山城かつやまじょうの氏家勢をはじめとした氏家郡各領主、笠間郡からの援軍を率いた満川忠親みつかわただちか、そして家中随一の精鋭として知られる紀清両党きせいりょうとうまでが出陣しているという。

芳賀高照が那須氏の烏山城からすやまじょうに入ったと知った宇都宮家は、近く一戦あることを予期すると、例大祭のために集った各領主に武装させて出陣の期を待っていたものらしい。

「ふむ、二千騎をそろえたとはいえ、街道を通るには縦長の陣列になろうな」

どこに隠し持っていたのか、老翁の枯れた手には黒の碁石が握られている。それを畳上の絵図に描かれた坂道に沿って、ぽん、ぽんと並べていった。

「対して那須勢は？」

老翁は、白の碁石を指先で弄ぶ。

「総大将の那須高資と客将の芳賀高照をはじめ、およそ三百余騎なり」

どよっ、と烏帽子の山々がゆれた。

「宇都宮の優勢ではないか」

「これは鎧袖一触がいしゅういつしよくであろう」

にっ、と婿は笑った。

「宇都宮家こそ関東一の弓取り。そなたには悪いが、これでは勝負にもなるまいて」

「なんのなんの。那須の兵といえ、与一を引き合いに出すまでもなく弓の強兵ばかりでございます」

老翁の指が、白の碁石を三つ並べた。

「次の物見は？」

「ただいま戻りまして」

「戦況を申せ」

「はっ、狭き一本道では寡兵も衆兵もなく、那須勢も初手は勢いのままに攻めかかっておりましたが、宇都宮勢もよく耐えて踏み止まり那須勢を押し返さんとしております」

「うむ、この絵図ではもの足りぬな」

老翁は、袍の袂から紅葉や公孫樹いちょうの葉をとり出すと、ぱらぱらと畳上の絵図にふりまいた。

いかなる手妻てづまであろうか、畳の一部がもぞもぞと盛り上がってきた。

木の枝でえぐった溝にちろちろと水が流れはじめ、畳の井草も芽吹いて稲穂のごとく揺れはじめた。

この面妖な事態にも、貴人たちは誰ひとりとして顔色を変えなかった。

眼下に小さな喜連川が出現していた。

早乙女の丘陵に、色づいた木々が生え茂っている。街道がうねり、白黒の碁石が騎馬侍や徒士かちに変わる。

白と黒の兵たちは、それぞれ那須勢と宇都宮勢であろう。

劣勢の那須勢はじりじりと後退し、宇都宮勢は数を嵩に着て那須勢を坂の下へたたき落とそうとしていた。

「しかれども、那須勢が三百余騎とは奇妙なり。烏山城に芳賀高照を招いたは先手をとって攻め込まんがためであろう」

「たしかに。塩谷氏の加勢があるにしたところで、寡兵もはなはだしきこと」

「やや、那須勢に塩谷の旗印がないぞ」

「よもや日和ったか」

めでたき祝言もどこへやら、合戦を肴に貴人たちは大いに昂たかぶっていた。

「おお、読めたわい」

老爺が膝を打った。

「塩谷氏は那須氏と通じておるのを隠し、喜連川の城が攻められたと宇都宮氏に後詰めを要請したのではないか」

「我が宇都宮勢は誘い出されたと？」

「しかり。後詰めのため、急ぎ早乙女を越えんとしたところ、そこで待ち伏せていた那須勢に襲われたのであろう」

「なれど、多勢に無勢は変わりなきこと。策を弄したにしても、もはや那須勢の負けでありましょうに」

老爺に反駁しながらも、新婿の伶俐な顔に不安の色が滲んだ。

「ほほっ、よく見やれ」

新嫁の白くしなやかな指先が、街道脇のある一点を指し示した。

両軍が激しく衝突している場を大きく迂回して、宇都宮勢の側面を衝かんとする少数の兵が隠れていたのだ。

「早乙女の地を知り尽くした塩谷の者が、那須の小勢を案内しておるのだ」

「うむ、ひとりが弓を構えておるぞ」

「あれは那須七騎に数えられた伊王野いおの氏の家臣にて、弓の名手として知られる鮎あゆヶ瀬せ実光さねみつでございます」

「誰を狙っておるのか」

「小高きところに登って、盛んに下知を飛ばしておる宇都宮の御大将であろう」

「おお、与一の再来とならんか」



観戦に熱が入りすぎたか、貴人たちは烏帽子の隙間から尖耳をぴんと立て、袍の裾を乱してふさふさの尻尾をまろび出していた。

「嫁御よ、<sup>さいころ</sup>骰子をふるのだ」

老爺が骰子をふたつ渡して命じた。

新嫁は、きりりと目尻を吊り上げて厳かに祈りを発した。

「南無八幡大菩薩、日光権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神よ、願わくはあの矢を当てさせたまえ」

ふたつの骰子を投げ転がした。

貴人たちは眼を<sup>む</sup>剥いた。

「<sup>ちょうろく</sup>重六！」

「最強の目じゃ！」

新婿の顔が蒼白になった。

ひょうっ、と矢が放たれると、見事に尚綱の胸板を射貫いた。

「あなや！」

「那須勢の勝ちじゃ！」

新嫁が喜色に満ちた勝鬨を挙げた。

宇都宮勢の総大将が討ち死にするや、那須勢は退く素振りをかなぐり捨てて、一斉に馬首をめぐらせた。

浮き足立った敵陣へと突入し、数で勝る宇都宮勢を早乙女坂の頂までたやすく押し戻していった。

優位な高所である。那須兵の放つ打ち下ろしの矢が容赦なく宇都宮兵に突き刺さった。首を打ち抜き、肩肉をえぐり、背中を深々と貫く。

上がるも下がるも自儘<sup>じま</sup>にならず、大いに混乱した宇都宮の騎馬と騎馬がぶつかり、もつれ、横倒しになって転がった。重い愛馬の下敷きになって息絶えた侍もいたであろう。

この劣勢を盛り返すすべもなく、宇都宮勢は転げ落ちるばかりであった。

左三つ巴の軍旗が踏みにじられた。

心無き軍勢にゆさぶられ、紅葉がはらはらと舞い散る。真っ赤に色づくのが待てないかのように血しぶきが浴びせられた。

満川忠親と笠間勢は、ここで退いては援軍の面目立たずと奮起し、乱軍の中で敵七騎を道連れに闘死した。

宇都宮氏一門の横田五人兄弟も那須の陣中へと果敢に切り込んだ末に、同じ枕で討ち死を果たした。

無残なり。

無情なり。

戦場は阿鼻叫喚の<sup>るっぼ</sup>坩堝であろうが、妖しき貴人たちの宴では寂として声もなし。

「哀れなり……」

新婿は、さめざめと泣いた。

「我が殿、おいたわしや……」

宇都宮氏への敵意をあらわにしていた新嫁も一転して菩薩のごとき柔らかな表情となり、夫の手をとって寄り添った。

「宴の余興とはいえ、我も心無きことを申しました。悪辣も狡猾も、人の愛しき性ゆえに生じるもの。せめて、我らは末長く睦みましょうぞ」

「うむ、そなたの真心がうれしや……」

敗残の兵が、氏家の城へと撤退していく。

「よもや、那須高資の調略が、宇都宮の城に残った壬生氏にも及んでいたとすれば……」

老翁は、ひっそりとつぶやいた。

宇都宮家の内訌が、またもや地獄の業火とともに噴出するのであろうか。

「はてさて……すべては人の世のこと、つわものどもが夢のこと……」

かくして、早乙女坂の合戦は終わったのであった。

祝いの宴はひっそりとつづけられ、やがて陽も傾いてきた。

暗くなるにつれて、ぽつり、ぽつり、と早乙女の丘陵に赤い灯が増えていく。松明ではない。淡く、儂い、魂の灯であった。

「はて、討ち死にした那須の侍にしては数が多い。ははあ、宇都宮勢の亡者どもが帰り道を忘れて迷ったのであろう」

「よいよい。めでたき日よ。やつらにも祝いの席に混ざってもらおうぞ」

出迎えるように、野辺山の裾にも、ぽつりぽつりと道なりに沿って狐火が灯った。

哀しき侍どもの魂は早乙女の坂を下り、荒川を渡って狐の嫁入りと混ざり合った。